岐阜経済大学論集 33 巻 4 号（2000 年）

ウォートンに見るニューイングランド

── 極限への挑戦 ──

加藤くに子

はじめに
Ⅰ　極貧の悲劇
Ⅱ　孤独の恐怖
Ⅲ　死の予兆
Ⅳ　ウォートンの訴え
まとめ

はじめに

A Backward Glance (1934) によると，Edith Wharton (1862–1937) は先祖が新大陸に渡ってきて「まず Massachusetts に住んだ」(9　以下引用文の記載方法に関しては注を参照) ということで，New England に深い関心を抱き，「私はニューイングランドの見捨てられた山岳村落の本当の生活を描きたいと長年思ってきた」(293) と記している。しかし，それは Mary Wilkins や Sarah Orne Jewett が描く「バラ色の光景」(BG 293) の牧歌的田園地帯からはかけ離れた彼女独自の印象であり，次のような当時のニューイングランドの現実に根ざしたものだ。

当時，マサチューセッツ州西部の雪に閉ざされた村々は，道徳的にも物質的にもまだ恐ろしい所だった。精神病，近親相姦，精神的・道徳的飢

餓感が，村の通りに長々と並ぶ塗装のはげた木製の玄関や，近隣の丘に人里離れて建つ農家の背後に隠れていた……（BG 293–4）

ウォートンの関心はこの地方の暗部に注がれていく。*Ethan Frome*（1911）の序文では，ニューイングランドの印象を「地表に露出した花崗岩」(xvii) と語り，*Summer*（1917）では，チャリティ・ロイヤルの出身地を「山の花崗岩のある側の下方の貧しい荒涼たる村」(173) と設定することによって，その印象を確たるものにしている。こうして，過酷な気候，迷信，貧困，無知，道徳的退廃等々によって生じる様々な物語が誕生する。

ウォートンはマサチューセッツのレノックスに邸を建て，1899年から1908年までの9年間，夏の住居（6月から12月まで）としてそこで過ごしている。75年の生涯を考えると，この期間はさほど長い年月とはいえない。それにも拘わらず，「ウォートンの出版されている85にのぼる短編小説の四分の一強がニューイングランドを舞台にしている」(NEI viii) ということで，彼女のニューイングランドへの関心の深さは量的側面から見ても明白である。もちろん，その中には「軽いコメディーから恐怖作品まで広範囲にわたる」(NEI xii) 様々な主題が含まれているが，*The Writing of Fiction*（1925）でウォートンが語るように，単独主題を取り扱うのに適している短編において（34），長編小説ではどうしても絞り込めないものを極限まで追求する試みがなされている。

Barbara A. White は，「おそらく，ウォートンは内なる自分とニューイングランドを関連付けたのだろう。彼女の最も恐れていた自分自身の抑圧，冷たさ，口に出せないもだえ，精神的飢餓感，文化的要素の欠落といった側面をニューイングランドに投影していったと思われる」(xxvi) と述べ，ウォートンの精神面と結びつけてニューイングランド作品を説明する。

しかし，本稿では精神面の単なる投影といった理解から一歩進めて，貧しさ，孤独，死の予兆の三点に絞り，その極限世界への挑戦という視点から

ウォートンのニューイングランド作品を探求していく。さらに，心身両面における極度の貧しさの中で，何を糧に人は生き長らえることができるのか，孤立と孤独が生み出す世界で，どの程度まで人は正気でいられるのか，死の予兆はいかなる方法で誰に下されるものなのかということを通して，生きることの本質と生命力の何たるかをも模索する。

I 極貧の悲劇

『イーサン・フロム』の同名の主人公を軸に貧困問題を考えてみる。まずイーサン・フロムの成功への道を閉ざし，極貧生活を甘受せざるを得ない状況にしたその原因を，自然環境的側面と人為的側面に分けて考察してみる。

自然環境的側面に関して第一に考えられることは，過酷な冬の気候である。この作品では，「冬がスタークフィールドを閉じ込め，村が青白い空からたえず補給される雪のシーツの下に横たわる」とある。そして，「12月の雪がすむと，燃えるような青い空は，光と空気の奔流を風景に注ぎ，風景はもっと強い輝きを送り返し」てきて，「太陽の見えない日が幾日も続いた後に水晶のような快晴が来る」のであり，続いて「2月の嵐が忠誠を誓った村のまわりに白いテントを広げ，3月の風が加わって荒々しい騎兵のように襲いかかる」(13–4) という風に，極めて激しく変化に富んだ冬の表情を見せる。この自然の激しさとは正反対に「死んだような静けさ」(13) にあるスタークフィールドの住民は，圧倒的な自然の脅威のもとで，ひたすら冬をやりすごす。その住民であるイーサンの物語は，24年前の冬に戻って，「村は2フィートの積雪に覆われ，吹きさらしの片隅には吹き溜まりができていた」という描写から始まる。そして，「鉄色の空では，北斗七星の先端部分がつららのように下がり，オリオン座は冷たいきらめきを放っていた。月は沈んでしまったが，楡の木々を通して見える白い玄関は雪を背景に灰色に見え，灌木の木立

は雪上に黒いしみをつけた」(26) と続く。この世界にイーサンは生涯留め置かれる。

第二に考えられることは，彼の家の立地条件である。イーサン・フロムは，「はるか彼方の野原には，農家が墓石のように無言で冷え冷えとそこここに立っている」(49) 地域に住み，「畑の上方には，あの寂しいニューイングランドの農家が大地と空の白い無限の空間を背に縮こまって，風景をさらに寂しいものにしていた」と，フロムの家は小さく見捨てられた家屋で，「その情景の悲痛さと圧迫感」(20) に語り手は言葉を失う。それは，「雪が止み，淡い太陽の輝きが，我々の上方の斜面にあるその家の哀れな醜さをさらけ出した」(20) ためであり，このような人里離れた所にひっそり暮していて成功を収めることは当然おぼつかない。

第三に考えられることは，ニューイングランドはアメリカの繁栄から取り残された地域にあることだ。作品の書かれた20世紀初頭，アメリカ社会は資本主義への道をまっしぐらに突進している最中だった。元気と覇気のある者は都会に出て，アメリカンドリームに夢中になった。この村でも「気のきいた奴はたいてい逃げ出す」(12) という状況で，居残った者は，逃げ出すことができずに村に止まらざるを得ない人だけだった。農村地帯は衰退の一途を辿る状況のもと，フロム家の農場も極めて経営が難しく，生活費を稼ぎ出すことすら困難な状態である。イーサンはニューイングランドの寒村に留め置かれた，アメリカ経済のしわよせ，逃げ出す金さえ工面できない貧困に喘ぐ人間ということになる。

次に人為的側面についてであるが，まず第一に挙げられることは，イーサンは時代の趨勢に合わない，自分に興味の無い家業を継がねばならなかったことだ。父親の事故死で，彼は学業半ばにして農場と製材所を一人で切り盛りしなければならなかった。工業化の波に乗って資本が都市に集中するなか，希望の無い農業と製材の仕事に甘んじざるを得ない境遇にあったのだ。

第二に挙げられることは，イーサンの不運である。大都会に出て技師にな

りたかったし，学問も続けたかった。幸せな結婚をしたかったし，恋人と心中を遂げたかった。しかし，夢を見て希望に胸膨らませ挑戦はしたもののうまくいかず，ことごとく運命に見放される。経済的な貧しさのみならず，精神的な極度の貧しさの中に放置されてしまうのだ。

第三に挙げられることは，イーサンは自分の意思を明白に表明し，その道を突進する饒舌さと行動力を伴なう人間ではなく，極めて寡黙な人物だということである。彼は「沈黙した陰気な風景の一部」であるとともに，「凍えた悲哀の化身」(14) なのだ。ウォートンも序文で，この作品の登場人物の特徴は「寡黙さと口下手」(xxi) と語っているように，心の世界は全面的に読者の想像力に委ねられる。さらに，イーサンは橇の事故で顔には赤い大きな傷跡を残し，足は引きずってしか歩けないという身体的な負い目さえある。妻のジーナも結婚して一年もたたないうちに，病気で沈黙の世界の住人に変わってしまう。唯一の明かりである恋人のマティー・シルヴァーも，橇の事故で車椅子の生活になり，言葉が消える。二人の生活が三人になり，経済的に逼迫するのみならず，イーサンは事故の後遺症で仕事の能率は下がり，困窮度は増す。暖房火の節約のために，彼は妻と恋人と狭い台所で過ごすことになる。この光景こそ悲惨さの極みと考えられる。ホワイトは「貧困と衰退がウォートンのニューイングランド作品の特徴だ」(NEI xii) と語るが，まさにこの貧困と衰退の最たるものがイーサン・フロムの物心両面の生活に具現される。

ではここで，イーサン・フロムが次第に極貧生活に陥っていく悲劇を描出するにあたってウォートンが使った手法について考えてみたい。まず第一は，鮮明な対比である。春から夏へと秋から冬への対比は，希望と絶望，幸せと不幸を象徴する。イーサンとマティーの淡い恋心は「春の小川」(44) のようであり，楽しいピクニックの思い出は夏，それに対して，二人の死の決意は冬で，手段は橇すべり。さらに，イーサンは「もしも母が冬ではなくて

春に死んだのならば，こんなことにはならなかったろう」(70) と人生の皮肉を悔やむ。次に，激しい躍動の冬の天候と，じっと何もせずにその冬を耐え忍ぶ村民の動と静の対比は，「スタークフィールドの気候の荒さと，その地方の死んだような静けさ」として描写される。この作品を通して最も顕著な特徴が雪の白と夜の闇の黒という対比であろう。イーサンとマティーはこの世での結びつきを拒まれ，死を決意する。凍てつく冬の闇という無彩色の世界で，天国を目指して二人は橇すべりでの心中を試みるが，失敗し，絶望しかないこの世に引き戻される。死ぬことすら二人には許されないのだ。共に深い身体的損傷を負い，その後の長い人生を，地を這う貧困の生活に縛り付けられる。

第二は，両義的意味合いを持たせて使う言葉をウォートンが用意したことだ。「ミルクのような白さ」(82) の額をしたマティーは愛の対象だが，いつも青白い顔色の妻ジーナは憎しみの対象で，雪の青白い光で「血の気の無い顔」(64) になり，イーサンが初めて怒りをぶつけた時は，彼女の顔色は「灰色から黒に変わる」(112) のだった。雪の白は，晴れていれば太陽光線で輝き渡り美の対象になるが，さもなければ，行動力を奪い人の足かせになる。沈黙にもまた両義的解釈をさせる。イーサンとマティーの愛情は具体的な言葉によって交わされることはなく，「無言の喜びの衝撃とともに二人を引き寄せ」(34) るが，「ドイツトウヒは二人を暗闇と沈黙のなかに包んだ。二人は地下の棺のなかにいるようだった」(167) と二人の別れが語られ，「星のない夕闇とともに深い沈黙がたちこめ，二人は何も言わずに身をもたせあった」(163) と絶望感に打ちのめされる。

第三は，比喩的表現で，これもまた貧困と不幸を象徴的に描き出す。イーサンの家は「墓石のように」ぽつんと存在し，「台所は納骨堂のような寒さ」で，不幸な運命を暗示する。そして，「フロム家の墓石が奇妙な角度で雪の上に輝いていた」(50) と，病気の妻と半身不随の恋人と足を引きずるイーサンとの 24 年に亘る悲惨な生活の伏線となる。農場の出入りに際し，フロム

家代々の墓の脇を幾度となく通ることによって，この作品の暗い色調がさらに濃くなる。

第四は，繰り返しだ。技師になる夢を実現するためにイーサンはウスターの工業大学に入る。しかし，一年して父親の事故で家に呼び戻され，一人息子の彼は家業を継ぐことになる。父親を追うように母親が病に倒れ，一年で亡くなる。母親の看病でフロム家に手伝いに来たジーナと結婚し，いざ人生をやり直そうとすれば，結婚一年で彼女も病魔に侵され，都会への脱出の夢は消える。その妻の看病に来たのが，身寄りの無いマティーで，彼女との心の通い合いに彼は再び人間味を取り戻す。しかし，それもわずか一年で，マティーはジーナに追い出されることになる。この一年という時間的反復効果は，階段を上るかのごとくに順次激しさを増していき，最終的にはイーサンとマティーの心中とその失敗に終わる訳だが，読者を追い詰めていく心理的効果は極めて大きい。

人間関係においては，母親の看病に来てイーサンに夢と希望を与えたのが親類のジーナだったが，すぐに彼を不幸に巻き込む張本人になり，憎しみの対象に変わる。この同じ状況が，マティーの場合も繰り返される。ジーナの親類で，父親の死により頼る人が無くなり，ジーナの看病に来る。彼女の若さと快活さが，またしてもイーサンに夢と希望を芽生えさせる。しかし，それもすぐに潰える。時間的反復，人間関係の繰り返し，沈黙世界への回帰といった様々な繰り返しが緊迫感を集中させ，一歩一歩貧しさに陥っていくその過程を鮮明に描き出し，「時々，私達は皆，まさに死の木陰を歩いているんだとは思いませんか」(B 228) という言葉に凝縮される世界を作り出す。そして，「農場でのフロム家の人達と墓の下で眠るフロム家の人達とは，あまり違いは無いと思うわ」(181) というヘイル夫人の言葉にイーサン・フロムの現在の極貧生活が見事に表現されている。

『イーサン・フロム』の貧困への道を概観してきた訳だが，この作品が貧困

の極限への挑戦となぜ言えるかについてここで述べてみたい。まず第一の理由は，批判に対するウォートンの極端な反応が挙げられる。『イーサン・フロム』が世に出た時，「ニューイングランドというより他の地で人生を送ってきた女性の作品」(Bell 10) と F.O. Matthiessen に指摘されたことに対して，ウォートンは強く抗議し，「『イーサン・フロム』は，ニューイングランドを知らない人によって書かれた上出来のニューイングランド物語の興味深い実例だと言及しているのを私は見た」と極めて強烈な印象を自伝『振り返りて』で語った後，「『イーサン・フロム』は，この場面が提示された丘陵地帯に私が 10 年暮した後に書かれたのであって，その間に，この丘陵住民の容貌，方言，精神的・道徳的姿勢を充分に知るようになったのだ」(BG 296) と反論し，この作品への思い入れの激しさを語っている。

第二は，「大きな喜びと充分なゆとりを持って書かれた本が『イーサン・フロム』だ」(BG 93) とウォートンが語るように，この救いの無い悲惨な作品を一気にのめりこんで喜んで書くことができるという点こそ重要であり，ここに彼女の極限への飽くなき挑戦の意欲が感じられる。さらに，この作品はフランス語習得のためにフランス語で書かれたものを修正して 7 年後に現在の内容にまとめたとのことだが，最初は二人の心中の場面はなかったと Doris Grumbach は序文で語る (x)。この最後の心中場面を加筆したことが，極限への挑戦であり，心中の失敗によりイーサンは貧困生活の奈落に落とされたのだ。

第三に，希望の芽を一つ一つ余すところ無く摘み取り，救いの無い生活の中に三人の登場人物を放置してしまうその手法にウォートンの意気込みが見て取れる。経済的には不自由無い上流階級に生まれ，豪華な邸をレノックスに構え，常に何人もの客を招待し，当時まだ珍しい自動車という文明の最先端をいくものまで購入して日々を送る本人と，日々困窮に落ち込んでいくイーサンとの格差は極めて大きく，彼女は貧困の何たるかを作品で体験しようと挑戦した。長年の観察と，豊かな想像力で，貧しさの極限をペンで追求

する。

第四に，この作品の社会的位置付けと出版前後のウォートンの実生活から推測される状況が，極限への挑戦を示唆していることだ。R.W.B. Lewis は，「『イーサン・フロム』は，これに先立つ数年間のイーディス・ウォートンの心の動揺の激しい時期の所産の一部だ」(308) と説明している。これは，「この間，彼女の人生で最も重要な三人のそれぞれとの関係――親友のヘンリー・ジェイムズ，恋人のモートン・フラトン，夫のテディ・ウォートン――が混沌に陥っていた」(398) と Cynthia Griffin Wolff が語るように，1910 年前後はウォートンにとって精神的苦痛が極限に達した時期でもあったのである。師であり常に尊敬の対象であったジェイムズが加齢と体力の衰えとで，恐怖感，孤独感，絶望感を募らせ，彼女に救いを求める。仰ぎ見ていた人の弱さを目の当たりにして彼女は混乱に陥る。フラトンとの突然の別れによる自身の深い喪失感，感情のかみ合わなくなった夫との離婚への耐えがたい闘争が彼女の心身を打ちのめす。

「『イーサン・フロム』は決してウォートン自身の状況を小説に直接に置き換えた訳ではないが，それにも拘わらず，明らかに彼女の苦境の類似性が見られる」(402) とウルフは語り，この作品に「彼女は深く強い個人的感情を吐き出した」(308) とルイスもいう。これは上述した状況を考慮に入れれば当然のことであり，ウォートンは心身両面に亘って，貧困とは何か，孤独とは何かを追求しながら，自分の人生を問うていった。貧困を極限まで突き詰めることによって，人生の手応えを模索し，生きることを確認していったのだ。ウルフは「『イーサン・フロム』が最も絶望的な結末になっている」(398) というが，ウォートンが絶望状態を意図して極貧生活を記しているのだ。彼女にとってこの作品は，貧困の極限への挑戦であり，その結末を悲惨な状態で放置することによって，生きることへの大きな問いかけもしているのである。

II　孤独の恐怖

孤独を考えるにあたり，ウォートン最後の短編である“All Souls'”(1937)を取り上げる。ホワイトは，主人公サラ・クレイバーンの体験を，近親相姦の被害者の苦しみと関連付けて考察しているが(NEI xxv)，本稿では，ウォートン自身に根深く潜む孤独感に焦点を絞り，それとの対決と，その極限状況からの脱出作品としての解釈で論を進めていく。

10月末の吹雪の日に，「もよりの町，ノリングトンから5，6マイル入った」，「人里離れた淋しい」(234)場所に建つ一軒家，ホワイト・ゲイトで，サラ・クレイバーンは，土曜の夜から月曜まで孤独の恐怖と闘う。物語は雪の降る中で始まり，サラはまず，執事と召使を下がらせ，くじいた足は安静にしておくように医者に言われたため，床に入るが寝つかれない。夜半に，邸にはいつもいる執事も召使も見つからず，自分一人であることが判明する。さらに，電話線が切れ，食料も無く，暖房も機能しなくなる。外部との連絡は絶たれ，人間世界からの隔離状況の中でサラは寒さに震え孤立する。大きな邸の外の「絶え間無く降り続く雪」が邸の沈黙を包み込み，その雪が，「邸内の沈黙を強固なものにし」(240)，「彼女が沈黙を見つめると，沈黙が彼女を見つめ返し」(242)，「彼女が階段を下りると，その沈黙は彼女と一緒に降りてきて，より重く，より濃密に，より絶対的なものに」(243)なっていく。「自分のすぐ背後に沈黙の足音を感じ，その沈黙が，そっと彼女と歩調さえあわせている」(243)とサラには思われる。すなわち，孤独な彼女に沈黙が取りついてしまったのだ。「冷酷で敵意のある沈黙」(242)は，無情で彼女から離れず，「この深い沈黙がついてきた……まるで彼女がその囚人で，逃げ出そうとすれば，彼女にとびかかるかのようである」(244)と悲壮な様相を帯びてくる。「この家は墓のようだった」(248)と思われる邸で，サラは

沈黙という怪物に襲われ，神経をすり減らし精神的死闘を繰り広げる。

孤独が生み出す沈黙の恐怖を突き詰めれば，死へと繋がることになるとウォートンは警告する。ここで，恐怖感を描き出すためにウォートンが使った手法を確認してみよう。第一に，彼女は人払いをする。邸の従業員を下がらせ，自室に一人残る場面から物語は始まる。第二は，雪を利用して周囲の音を消していく。雨音は心を癒す効果もあるが，雪は音を立てずに降り続き，積雪は人を閉じ込め，邸を外界から隔離する。孤独が雪の静けさと重なり，沈黙の恐怖が生じる。第三は，状況を暗黒の夜にして，孤立感を深め，時間の動きを遅くする。暖房が消え，電話が機能しなくなり，食べ物すらない。大きな邸に唯一人取り残され，足のけがさえ付加して脱出の可能性を断つ。孤独，雪，闇の恐怖の三重奏が，複合的・相乗効果を発揮し，沈黙の怪物を生み出し，その怪物にサラは追い詰められていく。

ウォートンは，視覚，聴覚，臭覚，味覚をサラから順次奪い取り，触覚だけを彼女に残す。五感のうち四感を奪われたサラは，残る触覚に意識を集中させることによって，寒さと孤独感は増大し，その恐怖感に圧倒される。この邸の名前の「ホワイト・ゲイト」(234) は，雪の沈黙世界への入り口を意味し，ウォートンは見事にあらゆる脱出口を閉ざす。しかし，時間がサラを現実に引き戻す。月曜になり，執事・召使・医者が彼女を訪れ，通常の日課に舞い戻り，サラは助け出される。そして，誰も彼女の恐怖体験を信じない。この状況に現実味を持たせるため，ウォートンは予兆となる見知らぬ女性を二度に亘り登場させて運命の使者としての役割を担わせる。さらに，サラは二度とこの邸に戻らずニューヨークで暮らし，この体験を己の胸に納めることによって彼女の恐怖感を読者に確信させる。もちろん，語り手である従妹を除いてということだが。こうしてウォートンは，サラの不思議な体験を通して究極の孤独が支配する世界を描き切る。

この作品のサラ・クレイバーンは，「上流階級の，年配の，子供が無い，一人で暮す女性で，召使達に依存している」と，まるでウォートン自身の状況

に酷似していて，主題も「ウォートンの中に深く居座っている恐怖」(231) だという説明まで付く。では，ウォートン自身の恐怖を生み出した孤独感の発生源を彼女の生育環境と結婚に見てみよう。

ウォートンは母親の Lucretia Jones が 37 歳の時に生まれた初めての女の子で，二人の兄は当時 15 歳と 13 歳になっていた。一般的には溺愛される状況にある訳だが，それに反し，「この赤ん坊は，ルクレティアにとって，ほぼ確かなことだが，喜ばしからざる驚きだった」(Wolff 12) ということで，母親の愛情不足，そして，アメリカとヨーロッパを行き来する生活，さらに，家庭教師による教育がウォートンに読書と孤独癖を植え付けた。父親の書斎で世界の書物を読み漁り，詩を書き，物語を考えることが彼女の喜びになった。しかし，唯一敬愛する父親は，彼女が 19 歳の時に亡くなり，彼女の孤独感は深まる。ホワイトはウォートンと父親とを近親相姦的関係で見る幾多の批評家に同意し，推論を試みる (xxiii–xxvii) が，本稿では『振り返りて』で示される懐かしい父親像で止めておく。その理由は，孤独を論じるにおいて，その真偽の程はさほど重要性が無いためであることと，もう一つには，生育過程で孤独であったことは，その問題を抜きにしても事実だと考えられるためである。両親の影響を考える場合，父子より母子関係がより大切であり，子供の人格形成への貢献度が高い。自伝で母親に対する記述は，装飾品や外見のみで愛情深い表現は全く出てこない (BG 26)。この冷たい母親との関係は，ウォートンの心に空洞を作るが，文学的貢献度はかなり高く，女性の冷酷さの様々な類型となって作品を豊かにしていく。

もう一方のウォートンの結婚に関しては，1885 年，23 歳で彼女は同じ社会階級の Edward Wharton と結婚し，社会制度上の安定を手に入れる。しかし，知的関心を夫と共有することはできなかった。夫への不満，結婚生活における苦痛をウォートンは自伝には記していないので，作品を通して探してみよう。“The Fullness of Life” (1893) では夫への気持ちを，主人公の女性がまるでウォートンの気持ちを代弁するかのように語る。

ええ，私は彼が好きだし，私達はとても幸せな夫婦だと思われているわ。でも，時々思うのよ，女性の本質というのは，部屋がいっぱいある大きな邸のようなものだと。玄関があり，そこを通って誰でも出入りするの。客間は，正式の訪問客を迎える所だし，居間は，家族が望むときに出たり入ったりするわ。でもその奥に，はるか奥に，他の部屋があるの。そして，この扉の取っ手は決して動かないの，誰もその部屋への道は知らないの，その部屋がどこに繋がっているのかも誰も知らないの。そして一番奥の部屋は，聖なる部屋で，魂が一人ぼっちで座って，決して訪れることのない足音を待っているの。(700)

こうして「ほんの手近に，宝と驚異がいっぱいの部屋」(FL 700) があるのに，決して夫は気付かないと孤独感を語るのみならず，「私達は，全くお互いを理解することがないわ」(FL 701) と付け加える。"The Long Run" (1910) のハルストン・メリックの「彼女の見識は，私よりずっと深く，ずっと鋭かった」(233) という言葉にウォートン夫妻の関係が端的に表現されている。当時，女性は「夫が家に居るときには，彼女は彼の世帯道具の一部であるように，彼が旅行中には，彼の手荷物の一部」(LR 211) と見なされていたが，ウォートンの自我はそれでは納得しない。そして，自分の本心に気付き，「怖いの，怖いのよ，窓の無い地下の穴に，私がずっと隠してきた私の本当の声を聞くのが……」(LR 224) と，希薄な空気と暗闇によって，本当の自我が土牢で窒息し，苦しんでいる様子を物語に託して語る。"The Reckoning" (1904) では，「魂は肉体よりもいっそう痛みやすい」(347) と孤独感の何たるかを表現し，「それは彼女と一緒に起き，寝る。眠れない夜中，彼女と一緒に目をさましており，街に出る彼女の後を追う」(17) というように彼女を苦しめていく。そして，「もし結婚が，無知故に結ばれた負債をゆっくりと一生かかって返済するものならば，それこそ結婚とは人間性に対する犯罪行為である」(R 347) とまで考えるようになる。客観的に見ても結婚生活における孤独感は明

白で，Susan Minot はウォートンの結婚生活を次のように語る。

> 結婚は幸せではなかった。テディ・ウォートンはおいしい食べ物を好み，ワインの味がわかるハンサムな男性だったが，子犬を溺愛するほかは，彼と激しい性格の妻との相互関係はほとんど無かった。結婚は28年間に及び，それはセックスも愛情も無い，双方に神経衰弱を引き起こすもので，テディの飲酒と不貞によって終わりを告げた。(vii)

このようにウォートンの孤独感は，体験に基づくもので，生育環境から結婚生活に引き継がれた大きな悩みでもあったのだ。生涯自分を悩ませた孤独感と，彼女は死を半年後に控えた年齢になってようやく正面きって立ち向かう勇気が出た。徹底的に追い詰めることができずにいたものが，人生の総括としてここでなされた。実体験の重みが孤独の恐怖世界を演出し，決して舞い戻ることのないニューイングランドの僻地に「ホワイト・ゲイト」という象徴的な邸を作り出し，短編小説として完成させた。サラが逃げ出す所は大都市ニューヨークであるが，ウォートンは大都市パリに暮しながらニューイングランドの懐かしい「マウント」邸を心に描き，自己の内面の葛藤を文字に凝縮していった。したがって，この作品は，自伝では触れられていないイーディス・ウォートンのある種の告白書でもあり得るのだ。

III 死の予兆

ウォートンは人間の生死を操るものに対して深い関心を示し，理性で得られぬ解答を幽霊物語という形式で探求していく。その中で "The Triumph of Night" (1914) と "Bewitched" (1925) を通して，死の予兆に対するウォートンの挑戦を追求してみる。フランク・レイナーとヴェニー・ブランドの死にゆく

二人にとっては，死とは突然訪れるものであり，それを予知するのは，前者ではジョージ・ファクソンという第三者，後者では，たまたま関わりを持ったオーリン・ボスワースとヒーベン牧師補の二人である。誰がいつどこでどのような死に方をするのか，また，その死は前もって誰かに知らされるのか否かという尽きせぬ疑問を，ウォートンは超自然の力を借りて探る。

「夜の勝利」では，ジョージ・ファクソンが，「数フィートもの積雪」のある，「寒さの厳しい白黒の風景」(183) の，『イーサン・フロム』の舞台からさほど離れていないノースリッジの乗換駅に降り立つ場面から始まる。連絡ミスで出迎えの無いファクソンが極寒の中で思案にくれていると，フランク・レイナーが手を差し伸べ，土地の名士である叔父のジョン・ラヴィングトンの邸に泊まることを提案し案内される。天使のような魂を持つこの青年が，外見は完全無欠の紳士である叔父に殺されることになるのだが，ファクソンの鋭い本能がラヴィングトンを見た時から理由の無い警告を発し始める。

ウォートンは極めて鮮明な対比をもって，ファクソンに死の予兆を見せる。第一は，寒暖の差で，ファクソンは吹雪の凍てつく中を，レイナーの橇でラヴィングトン氏の邸に着き，「温かさと明るさ，温室植物，あわただしく行き交う召使達，舞台装置のような広く目を見張るオーク材の玄関の強烈な印象」(188) に圧倒され，また，邸の華やかさは，「その部屋は花でいっぱいだった」，「花はいたるところにあった」(189) と花を中心にギャラリーも配して華麗さを描出する。しかし，「そこは，快適さへのあらゆる工夫がこらされているにも拘わらず，奇妙に冷たく，人を喜んで受け入れてはいない」(188) とファクソンには感じられる。次第にファクソンはいわれの無い恐怖に取りつかれ，それが彼を締め付け，夜中で極寒にも拘わらず，徒歩で邸から逃げ出す。

> 路上の雪は深くて，でこぼこしていた。彼はわだちにつまずき，吹き溜まりに沈み込んだ。風は花崗岩の絶壁のように彼に激しく吹き付けてき

た。まるで目に見えない手が彼の身体を鉄のベルトで締めつけるかのようで，彼は時折立ち止まり喘いだ。(201)

このように困難な状況下での脱出行は，無謀であり，理解され得るものではないが，彼はそうせずにはいられなかった。それだけのおぞましさを肌にひしひしと感じていたのだ。邸から逃げ出すこと以外，その不安から逃れる術は無かった。ファクソンは幸い，探しに来たレイナーに救出される。

第二は，ラヴィングトン氏の二面性である。「ジョン・ラヴィングトンの富，絵画，政治活動，慈善活動，親切なもてなしといった噂が聞かれない所はなく，山奥までも轟き渡るものだった」(185) という名声の氏は，「彼を一種の乾いた大げさな丁重さで歓待し」(188) てくれるが，ファクソンには何か納得できない感情が湧き，ラヴィングトン氏の背後に二度に亘り，彼の化身を見る。しかし，それはファクソンにしか見えない。最初，兄弟か双子かと考えるが，「その男の退出が，極めて速やかに音も無くなされたことに困惑した」(192) ファクソンは，後にそれがラヴィングトン氏の邪心の化身だとわかる。実物の穏やかさと正反対の化身は，常に敵意を持ってレイナーから目を離さない。このように世間の大立者である叔父の甥への邪心が，第三者であるファクソンにだけ極めて強烈に伝えられる。

第三は，レイナーの朗らかさと運命との対比である。「フランク・レイナーは，信頼感と素晴らしいユーモアを撒き散らし，人との付き合いを容易にする特別の人間の一人だった」，「大自然が顔と心とを調和させて下さる時だけに出る……優しい微笑み」(186) を浮かべた無垢の典型のような青年であり，叔父のラヴィングトン氏に対する信頼感には全く揺るぎは無い。しかし，結核を病んでいる。そのため，外見の朗らかさとは正反対の衰弱が手に象徴的に現れる。「とても長く，血の気が無く，消耗し，すごく年寄り」の手をしているので，「奇妙だ，健康な顔だが死にかかっている手だ」(187) と思わずファクソンはつぶやく。

善人が死に，悪人が生き残る世の皮肉を，全くの第三者におりる啓示という形でウォートンは示す。ここでウォートンは死の予兆というのはどのようになされるかの実験をしているのだ。この作品では，利害関係を持たない人間にしか，神の恩寵は現れないことを伝える。自分の運命を予測するのではなく，他人の運命がわかるのである。客観的判断のできる人間に予兆が示される。さらに，予兆による強烈な印象を第三者であろうと無傷で受けることはできないと彼女は語る。ファクソンはラヴィングトン氏との面会の後，病に臥し，回復後にレイナーの死を知る。事実確認は病後にしかできない。予兆という形で示される警告を正確に読み取りさえすれば，悲劇を免れることができるのかもしれない。しかし，その能力は人間には無いのだと言わんばかりにレイナーをあの世に送る。生死を司るのは人間ではないと主張し，人力の及ばぬ，理性が機能しない世界が存在することをウォートンは強調する。そして，予兆として信号は送られても人間は難局に即座に対処できる能力は持っていないことに対して，ウォートンは哀しい諦観を示す。

「魔法をかけられし者」も，『イーサン・フロム』とほぼ同じ地域を舞台にした作品で，ラトレッジ家は，「夏でさえ陰気で淋しい雰囲気を帯びている」(210) 所にあり，ソール・ラトレッジが，すでに死んでいるかつての恋人オーラ・ブランドと会う場所は，湖のほとりの「荒れ果てた小屋」(224) であり，季節は冬だ。「まるで墓一帯を全て包み込むために，空から降ってくる巻きつくシーツ」(217) のような「雪がしんしんと降っている」(209) 中をシルベスター・ブランド，オーリン・ボスワース，ヒーベン牧師補の三人の男が橇でラトレッジ家に乗りつけるところから話しは始まる。ラトレッジ夫妻の悩みを解決するために集められた三人は，夫が魔法をかけられたように今は亡き恋人と会い，それが原因でやせ細り，今にも死にそうだが何とかして欲しい，という奥さんの訴えを聞く。昔の恋人というのが，三年前に死んだブランドの長女のオーラで，ブランドはそのようなばかげた話しに怒りを露わに

する。牧師補が話しの進行を受け持ち，オブザーバーとして常識人のボスワースが立ち会うという形式で話しは進行していく。やせ細り，人間味を完全に喪失したラトレッジ氏の登場とともに，事実とは考えられない話しが現実味を帯び，その解明へと話しは進展していく。ラトレッジ氏とオーラが会う廃屋に三人がそれぞれの思惑を胸に集うことになり，そこで悲劇が起きる。

「宵の明星がしみ一つ無い雪の上に輝きを放ち，その透明な輪の中にブランドはじっと佇み」(225–6) という状況設定のもとで山場を迎え，彼は小屋に入って下の娘のヴェニーに発砲してしまう。彼が小屋から出てきた時，「木々を通して突然輝き出した夕日が，ブランドの顔を血のように紅く染めた」(226) と異様な雰囲気を鮮明に伝える。

ウォートンが現実的でない話しに真実味を持たせ，狂気によって最愛の者を殺してしまうという悲劇をどのような手法で描出したかを考えてみよう。第一は，凍てつく雪の世界，それも人里離れた廃屋で，時は夕暮れ時という舞台を設定したことだ。人を遠ざけ，今は使われていない崩れ落ちんばかりの小屋を舞台とすることで，生命の危機と，人間ではなく幽霊の仕業と思わせる効果を狙った。さらに，夜の帳が下り始める，曖昧模糊とした時間帯を選択することによって，理性を追い出し，ブランドを狂気へと追い詰める。

第二は，加害者となるシルベスター・ブランドの人物描写に工夫を凝らす。彼は「ローントップへの道の途中にある古いビークリフ農場の男やもめ」(209) ということで登場し，勤勉な農夫として，まず印象付けられる。しかし，「彼は自分のすることにめったに誠意を見せない男」で，容貌は，「叩き切られたような顔つき」(209) と不気味さを漂わせ，「無口で荒々しく，気難しい」(221) と近寄りがたい雰囲気を出す。上の娘のオーラを亡くしてから，彼は酒も飲むようになる。「秋の夕暮れ時，彼が二つの墓（妻とオーラ）をゆっくりと歩いて行ったり来たりして，墓石を見下ろして佇んでいるところを村人達が目にした。しかし，彼はそこに決して花を持っていかなかった

し，草木も植えなかった」(222) と行動パターンも特異なものがあり，決して親しみの持てる人物ではない。

第三は，反復行為の効果を正確に把握し，ウォートンはそれを巧妙に使う。まず，不吉な出来事の伏線として，ブランド家の血筋を持ち出す。「火あぶりにされた北アシュモアの女性がブランドという名だった」(221) と魔女裁判を引き合いに出して血塗られた家系を強調する。さらに，「その血筋のためにシルベスター・ブランドは，妻にした従妹とは正式の結婚はしなかった」(221) と血族結婚であることが語られる。しかし，オーラとヴェニーという素晴らしい娘に恵まれる。そのうち妻を病気で亡くし，ブランドはオーラの結婚に反対し，彼女も病に倒れ亡くなる。そして，今回の悲劇が起こる。このように三段重ねで，妻，オーラ，ヴェニーと，ブランドの責任が一度目より二度目，二度目より三度目と強まっていく。妻は病死でしかたがないにしろ，オーラはブランドの反対で結婚できずに死に，ヴェニーは悪意が全く無かったにも拘わらず自分で手を下してしまったのだ。

このように，悪意無くして加害者になることがあり得るという，運命に対する痛烈な批判と追求が，魔女裁判という歴史的背景のもとに展開する。血塗られた家系，妻の死，長女の死，さらに，末娘まで亡くす。父親としての不幸と，狂気の世界で加害者になってしまう不幸。ブランドはその苦痛を背負って，それでも生き続けねばならない。ジョージ・ファクソンが未然に防げたかもしれない予兆を，理解できなかった自責の念でその後の人生を送らねばならないのと同様，ブランドもさらなる重荷を負って生きねばならないのだ。理性で制御することのできない世界が存在することを，ウォートンはニューイングランドの暗い過去に重ねて徹底的に描き出し，生きることの哀しみを伝える。

幽霊物語の目的は「脊髄に冷たい戦慄を送る」(GS 11) ことであり，人生で最も恐ろしい戦慄は当然「死」に関するものだ。したがって，「夜の勝利」と「魔法をかけられし者」では，死を主題にし，死とは突然訪れるものであり，

死に対する予知能力は個人差が大きく，強弱はあるものの実存するのだとウォートンは語る。前者では，第三者による死の予知を，後者では，関係者二人の予知と，悪意の無い人間が，狂気の世界に巻き込まれ，加害者になるのみならず，溺愛する娘を手にかけるという究極の悲劇を，ニューイングランドを舞台にした幽霊物語でウォートンは探求したのだ。

IV　ウォートンの訴え

以上三分野に絞ってイーディス・ウォートンの極限への挑戦を見てきた訳だが，なぜこの三分野を取り上げたのかについて，横の関連を見ると，生きるということはどのようなことであり，生命とはいかなるものなのかという共通主題が見えてくる。

イーサン・フロムの経済的貧しさを突き詰めていくと，それは経済面に止まらず精神的欠乏感とも密接に繋がっていることがわかった。フロムは共同生活をしていながら，一人で暮す以上の深い孤独の世界に生きている。その孤立と孤独の世界を突き詰めたのがサラ・クレイバーンの恐怖の体験となり，サラは時の経過という，個人的努力を超えたところで救出される。孤独の世界にこれ以上留め置かれたら，サラは果たして正気でいられたであろうか。恐怖の限界と突然の救出はどのように決まるのか，または，人の力の及ばぬ時を誰が管理しているのであろうか。この正気と狂気，ひいては生と死の境界はどこにあるのか。この問いかけの答えの具現者が，ジョージ・ファクソンであり，シルベスター・ブランドなのだ。この二人は被害者と加害者という面においては対照的で，前者は利害関係が無い第三者故に，フランク・レイナーの死を予知し，後者は本人の意思とは関係なく加害者になり，それが悪しくも繰り返される悲劇である。しかし，二人は被害者になる理由も加害者になる必然性も無いのに，超自然の力に突き動かされてしまう。すなわち，

運命の皮肉によって想像もしない世界に投げ込まれ，過酷な人生を背負うという点は共通である。すなわち，生と死は善悪，正邪という概念では把握できないもので，個人の力の及ばぬ見えざる手に握られているのだとウォートンは語る。

極限世界の探求を縦糸に，生命力の何たるかを横糸に編まれたニューイングランドの諸作品から，ウォートンの強い訴えが浮上してくる。すなわち，いかなる状況であろうと，生を与えられた以上生きねばならないということと，環境や時代や不運に負けて死へ逃避することは許されないということの二点である。

「単に無慈悲なだけでなく不自然だ」(Bell 10) と批評の出た『イーサン・フロム』では，共同生活ができるはずのない関係の三人を，狭い台所に24年間も閉じ込めてしまう手法に注目したい。現実生活では不可能と思える状況を，憐憫の情を全くかけず，さらに，楽しんで一気に描き切る潔さに，ウォートンの生きることへの訴えが隠されている。自然に同化しているかに見えるイーサンに，ウォートンは生命力の何たるかを語らせる。このような悲惨な状況でも人間は生きることができるのだと。「たいていの奴なら，きっと死んでただろう。でも，フロム家の奴は丈夫だからね。イーサンは百まで生きるだろうさ」(EF 6) と村人に言わせ，生命力とは人間の力ではどうにもできないほど強いもので，それを手折ろうとすることは何人たりとも許されないと語る。その証拠に，イーサンとマティーの心中を失敗に終わらせる。

では，生命力の源，それを維持するエネルギーは何かというと，それは自然である。イーサンをスタークフィールドに閉じ込めたのが過酷な自然であるとともに，彼を慰め，生きる力を与えてくれるのも自然なのだ。「イーサンは常に，まわりの誰よりも自然の魅力に敏感だった。……不幸な時でさえ，野原や空が深く強力な説得力で話しかけてきた」(EF 33) と彼の豊かな感性が示され，自然との対話と長い年月が彼を癒していく。「冬山の後ろに沈む冷たく赤い夕日，黄金に染まった刈り株の斜面の上を飛ぶ雲の群れ，太陽

で照らされた雪の上にくっきりと浮かぶ米栂の青い影」(EF 34) といった風景や，「冬の朝は水晶のように澄み切っていた。日の出によって，きれいな空が赤く映え，植林地の縁の影は濃い青，はるかかなたの森は，白くきらめく野原の向こうで霧のように映った」(EF 56) といった光景が彼に力を与える。したがって，イーサンの悲惨極まりない現状においてさえ，「彼の寡黙さに敬意が払われ」(EF 5) ていて，「彼の沈黙には敵意はなかった」(EF 14) ということで，極貧生活に喘ぐ 24 年の間に心身共に滅ぼさず，まだまだ生きるであろうことを示唆するところにウォートンの意図を読み取ることができる。

「万霊節」では，サラ・クレイバーンが助け出されることが，ウォートンの生きることへの訴えを証明している。ホワイトは，「凍りついた沈黙の世界から逃げることのできた登場人物はほとんどいない」(NEI xxvi) と語るが，サラは現実世界に無事に戻る。ウォートンが晩年に辿りついた人生観，世界観が，サラをニューヨークという安全な世界に戻したのだ。彼女の人生での課題を極限まで突き詰めて探求し，孤独の正体を手にして，それで終わらせず，日常生活に戻ることで生命の危機まで回避させる。これこそが彼女の訴え，与えられた状況がどのようなものであっても受け入れて，自分自身の生を生きるしかないのだという諦観へと繋がるのだ。

「夜の勝利」と「魔法をかけられし者」では，理性を超えた世界が存在し，その力によって人間の運命は思わぬ方向に進む可能性をウォートンは示唆する。ジョージ・ファクソンは将来有望な若者の死を予知しながら，救うことができず，本人も病床に臥す。ファクソンは，好んで飛び込んだのではなく，偶然に引き込まれた未知の世界で，唯一利害関係を持たない人間として遺言状の署名に立ち会う。濁りの無い心と目で状況を見て，その純粋さが第六感を呼び覚ます。ラヴィングトン氏の極めて否定的な強烈な個性が彼の住まいのあらゆる所に染み込んでいるとファクソンに感じられるのは (TN 188)，理性ではなく直感なのだ。ラヴィングトン氏の仮面を剝いでいくのも，この忌まわしい邸から逃げねばならないと心をせかすのも，理性を超えた直感なの

である。この天啓はいつ誰に下りるかは，決してわからない。しかし，存在するのだとウォートンは語り，さらに，不幸な出来事はある日突然起こるのだと強調する。これは1910年，“The Eyes”と同じ頃，類似する主題で書かれた作品だが，人類の不幸と考えられる第一次世界大戦の開始という，折しも，暗雲垂れ込める時期にこの作品が世に出る運びとなったことも象徴的と言えるのではなかろうか。

シルベスター・ブランドは，家族を一人一人亡くしながら，それも我が手で最愛の娘を手にかけ，それでも唯一人生きていかなければならない。彼が意図したのではなく，異常な世界に否応無しに巻き込まれ，狂気の世界で，反射的に起こした行動が全てを破壊してしまう。ニューイングランドの魔女裁判の血塗られた歴史を背景に，一族の不幸と血族結婚の否定的側面を重ね合わせ，外見的には極めて幸せな一家を呪われた運命へと引き込む。しかし，ウォートンはブランドを決して殺すことはしない。何のために生まれ，何のために生きるのか，ブランドにはもう夢も希望も生きる目的すらも無くなるが，それでも生きねばならない。これがウォートンの到達した哀しい認識であり，命は理性を超えたところで管理され，与えられた生を生きることが人間の務めだという諦観を示しているのだ。

「なぜそんなに書くことに頑とした切迫感を彼女が感じていたか」(xii) という問に，Cynthia Griffin Wolff は，ウォートンの家庭環境を挙げ，Gloria C. Erlich もウォートンの創造的エネルギーの源泉を彼女の家庭環境に求める。幼い頃からの彼女自身の書くことに対する情熱はもちろんのこと，母親の愛情の薄さがウォートンの執筆活動の源泉であり，満足のいかぬ結婚にそのエネルギーが引き継がれる。

さらに，生涯を通じて彼女の文筆活動を支えた人物がいたことも大きな理由だろう。それは Walter Berry で，1883年に知り合い，1929年に彼が死ぬまで交際が続くことになる。彼は，彼女の「心と魂が，ひもじく渇いてい

る」(BG 119) ことを見ぬき，執筆の手ほどきをしただけではなしに，心から彼女の執筆活動を応援し，生涯彼女を支える。ウォートンは *The Greater Inclination* (1899) の出版に際して，文学の世界で生きる決意を固め，「文学の世界がこれからの私の国であり，その新しく得た市民権を私は誇りにする」(BG 119) と高らかに語る。二人の関係は，「愛情は友情より深いけれども，友情は愛情よりもっと範囲の広いものだ。私達の関係の美しさは，その両方の広がりに及んでいることだ」(R 210) という言葉が示している通りであろう。

決して幸福な結婚生活ではなかったものの，離婚への道は長く厳しく，1913年にようやく成就する。そのような状況のもと，1907年には，45歳でモートン・フラトンとの生涯忘れ得ぬ出会いがあり，その2年後に別れを経験したものの，自分自身への深い理解に至りつく。この肉体的・精神的苦闘が，その心の叫びが，ニューヨークでもボストンでもなく，ニューイングランドに結びついていく。人里離れた寒村の世間に見捨てられた人々と，冬の過酷な気候が，彼女の感性を呼び込み，ニューイングランドを舞台にした作品を執筆することによって，彼女の心身両面に亘る浄化がなされていった。Shari Benstock は，「ウォートン自身は，ノイローゼを芸術に転化することで，この自己表明の恐ろしい欠乏によって生じる悲劇を回避したのだ」(458) とウォートンにおける著作の意義を強調する。

まとめ

『イーサン・フロム』の内容があまりに悲惨であるため，「貧困と孤立が女性を魔女に変え……男性を沈黙の殉教者にとどめおく」(57) お伽噺だと解釈する批評家もいるとホワイトは語るが，ウォートンはニューイングランドの過酷な気候を通して，生きることの難しさを突き詰めていく。イーサン・フロムのあらゆる希望を摘み取り，彼に身体的障害を負わせ，極貧の生活に放

置する。サラ・クレイバーンに沈黙が支配する恐怖の世界を体験させ，孤独の何たるかを突き詰める。生と死の境界の不可解な世界と人間の理性の不確かさを認識するために，予兆，予感を描き出し，理性の及ばぬ所での凍りつく事実を追求する。こうして貧困，孤独，死の予兆の極限に挑戦することによって，ウォートンは己の精神浄化を果たすとともに，生きることへの自信を手にしていったのだ。さらにニューイングランドの白い雪に自然の美しさと，人生を飲み込む残酷さを盛り込み，移り変わりの激しい気候によってかもし出されるその光と陰の，陰の部分に，己の魂の叫びを投影した。彼女の精神的飢餓感がニューイングランドの暗部と共鳴し，自身の肉体的不調を登場人物にかぶせ，上流階級の優雅な女性という外見の下にある，激しい精神的渇望と知的飢餓感を作品に盛り込む。こうして，彼女の極限への挑戦が，ニューイングランドを舞台にした数々の作品に凝縮され，生命力の強さを謳いあげるのみならず，いかなる状況にあろうと，それぞれが与えられた生を生きねばならないという強い主張へと導いていったのだ。

〔注〕

引用文に関しては，文中の著者，又は書名から引用文献が明白な場合は（頁）のみ記す。その他は（著者と頁）か，下記の略号を使用する。但し，論述上引用の頻出する作品――Ⅰでは *Ethan Frome*，Ⅱでは "All Souls'"，Ⅲの前半では "The Triumph of Night"，後半では "Bewitched" ――からの引用は（頁）のみで，略号を省くことにする。

A Backward Glance. は（BG 頁）で記す。

Ethan Frome. は（EF 頁）で記す。

The Ghost Stories of Edith Wharton. は（GS 頁）で記す。

The Complete Works of Edith Wharton, IV.

この中の "The Reckoning"（1904）は（R 頁）で記す。

The Complete Works of Edith Wharton, XXVI.

この中の "The Fullness of Life"（1893）は（FL 頁）で記す。

The Complete Works of Edith Wharton, XII.

この中の "The Long Run"（1910）は（LR 頁）で記す。

Wharton's New England: Seven Stories and Ethan From.

この中の "Introduction" は（NEI 頁）で記す。

"The Triumph of Night" (1914) は (TN 頁) で記す。
"Bewitched" (1925) は (B 頁) で記す。
"All Souls'" (1937) は (AS 頁) で記す。

〔引用文献〕

Bell, Millicent ed. *The Cambridge Companion to Edith Wharton.* New York: Harper & Row, 1995.

Benstock, Shari ed. *The House of Mirth by Edith Wharton.* New York: St. Martin's Press, 1994.

Lewis, R.W.B. *Edith Wharton: A Biography.* New York: Fromm International Publishing, 1985.

Wharton, Edith. *A Backward Glance.* 1934; rpt. New York: Charles Scribner's Sons, 1964.

——. *Ethan Frome.* 1911; rpt. New York: Penguin Books, 1993.

——. *The Ghost Stories of Edith Wharton.* New York: Scribner Paperback Fiction, 1973.

——. *Summer.* 1917; rpt. New York: Bantam Books, 1993.

——. *The Writing of Fiction.* 1925; rpt. New York: A Touchstone Book, 1997.

White, Barbara A. ed. *Wharton's New England: Seven Stories and Ethan From.* Hanover: Univ. Press of New England, 1995.

Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton,* 2nd ed. 1977, rpt. New York: Oxford Univ. Press, 1995.

Yoshie, Itabashi & Sasaki Miyoko ed. *The Complete Works of Edith Wharton, IV.* Kyoto: Rinsen Book, 1988.

——. *The Complete Works of Edith Wharton, XII.* Kyoto: Rinsen Book, 1988.

——. *The Complete Works of Edith Wharton, XXVI.* Kyoto: Rinsen Book, 1988.